

ミルナー・キンダーガルテンの南アフリカ経験

（一八九九—一九一〇年）と「シティズンシップ」

堀 内 隆 行

【要約】二〇世紀初め、イギリス帝国は、第二次南アフリカ戦争（一八九九—一九〇二年）、南アフリカ連邦結成（一九一〇年）の二大契機を経て、ケープ、トランスヴァール等南部アフリカ諸地域の一元的支配を最終的に確立した。この確立を現地において推し進めた中心勢力が、L・カーティス等一人の、いわゆるミルナー・キンダーガルテンである。本稿は、その南アフリカ経験を、「シティズンシップ」（市民として政治に参加する権利／市民意識）の観点に立つて考察する。メンバーによる白人の「シティズンシップ」涵養にはトランスヴァール再建時、エリート志向等の限界が存在した。しかし、こうした限界は二つの契機を経て変化する。つまり、第一に中国人労働者導入問題（一九〇四—〇六年）は「白人国家」の認識を、第二に連邦結成は「帝国を上位に置く」コロニアル・ナショナリズム」の認識をメンバーに付与した。かかる示唆を得て、メンバーは一九一〇年以降、コモンスウェルスへと向かう帝国全体の再編に際しても中心的役割を担う。その際にも、「シティズンシップ」の涵養、もしくは非西洋世界に「市民社会」を移植する演出は重要な意味を有した。

史料 八六巻六号 二〇〇三年一月

はじめに

二〇世紀初め、イギリス帝国は、第二次南アフリカ戦争（一八九九—一九〇二年）、南アフリカ連邦結成（一九一〇年）の



南部アフリカ

二大契機を経て、ケープ、トランスヴァール等南部アフリカ諸地域の一元的支配を最終的に確立した。この確立を現地において推し進めた中心勢力が、L・カーティス等一人の、いわゆるミルナー・キンダーガルテンである。キンダーガルテンのメンバーはイギリス出身であるが、一八九九―一九一〇年、南アフリカに滞在した。一九〇五年までは、高等弁務官A・ミルナー配下の若手スタッフとしてトランスヴァール再建に携わり、同年以降は、連邦結成に関与している。こうした経験を得て、メンバーは帰国したあと、イギリス帝国全体の再編に際しても中心的役割を担う。二〇世紀前半の帝国は、自治領（あるいは白人定住植民地）の独立志向に直面し、体制維持のための改革を不可避の課題としていた。ゆえにメンバーは、帝国Ⅱコモンウェルス、つまり本国と自治領との対等の関係を推進し、一九二六年のバルフォア宣言、一九三一年のウェストミンスター憲章の環境を整備する。思想、政策提言の側面では、一九一〇年、『ラウンド・テーブル』誌を創刊、同誌を中核とするラウンド・テーブル運動をはじめた。また政策形成の側面でも、一九一九年のインド統治法、一九二二年のアングロ・アイランド条約各々の成立に寄与している。このようにキンダーガルテン

は、植民地の事情に精通したイギリス本国側の主勢力として、二〇世紀の南アフリカ史、イギリス帝国史の双方に相当の存在感を示した。

しかし、先行研究がキンダーガルテンの役割を強調するようになったのは、比較的最近のことである。先行研究は、対象時期に応じて次の二つに大別しうる。

第一に、南アフリカ連邦結成をめぐる研究群がある。この分野では従来、本国側ではなく植民地側の役割を強調する立場が支配的であった。つまりL・トンプソン等のように、トランスヴァールのアフリカーナ（一九世紀末以降、オランダ系住民が自称。ボーア人）指導者のイニシアティブを強調し、キンダーガルテンの役割に対しては否定的な見方が強かった。^①しかし近年は、その役割を強調する傾向が高まっている。例えば、M・レガシックはアバルトヘイトへと通じる人種隔離体制の確立が、S・マークス&S・トラピドは経済的近代化が、S・デュボウはイギリス帝国を上位に戴く「コロニアル・ナショナリズム」の確立が、連邦結成の時期、メンバーの関与によりはじめて実現した、と結論づけている。^②

第二に、ラウンド・テーブル運動をめぐる研究群がある。この分野では従来、W・ニモックス、J・E・ケンドール等のように、政策形成の側面に特化する研究が多かった。こうした研究では、本国政治家ではなく自治領政治家のイニシアティブを強調し、運動の役割に対しては否定的な見方が強かった。他方A・メイの近業は、運動と世論との関係に注目し、一つの画期を成している。メイは『ラウンド・テーブル』誌について、『タイムズ』紙、BBC同様の評判を追求した」と記し、同誌が二〇世紀を通して、帝国Ⅱコモンウェルス規模の世論形成を志向したことを指摘する。^③また運動組織についても、シンクタンクの側面と並んで、「ロンドンに本部、各自治領に支部」をおくアソシエーション（任意団体）の側面を強調する。^④^⑤

しかし、以上の先行研究には、次の二つの問題点が存在する。問題点の第一は、南アフリカ連邦結成をめぐるものと、ラウンド・テーブル運動をめぐるものとが分断状況にあることである。先行研究は、キンダーガルテンの南アフリカ連邦

結成への関与がラウンド・テーブル運動にどう影響したか、という視座を軽視してきた。ゆえに、「植民地経験」と広義の政治文化との関係を問う近年の研究をふまえつつ、キンダーガルテンの南アフリカ経験を再構成する必要がある。

問題点の第二は、キンダーガルテンと「シティズンシップ」(市民として政治に参加する権利/市民意識)との関係も未解明の状態にあることである。「シティズンシップ」の観念はキンダーガルテンの思想と運動の中心に位置し、またキンダーガルテンは、南アフリカと帝国Ⅱコモンウェルスにおいて、この観念の中心的思想家集団、運動家集団であった。メンバーは、「シティズンシップ」に関する著書も数多く残しており、このことは、他の指導的立場にある人々が持続的影響力をかくも有していないこととは対照的である。^⑦しかし、こうした問題に対する先行研究の関心は、概して低い。ラウンド・テーブル運動をめぐってはメイが多少の示唆を与えているが、南アフリカ連邦結成をめぐる研究は人種差別の側面に集中し、存在しない。^⑧

そもそも、イギリス帝国史研究一般において、「シティズンシップ」への関心は希薄といえる。周知のとおり、イギリス社会は今日、NGO等民間公共団体への依存度をますます高めており、こうした現況を反映して、イギリス史研究も近年、このテーマへの関心を深めつつある。^⑨他方、民間公共団体への依存度の高まり、という点で現況を同じくするコモンウェルスについて、その歴史的特質を解明する研究は、N・オーウェンがインドの事例を検討した例外を除き存在しない。^⑩しかし、帝国Ⅱコモンウェルスを本国と自治領との対等の関係として推進することは、かかる関係を志向する市民の政治参加を自治領においても引き出すことを前提としていた。「シティズンシップ」の理解なくして、ウェストミンスター体制を理解することはできない。また、イギリス帝国はコモンウェルスへと向かう長い過程において、自体を非西洋世界への「市民社会」の移植者と演出した。例えば、インド統治法の成立に際して、現地社会の代表民主制的権力との協調(ダイアリー)を図るキンダーガルテンの努力には、その初期の様相が窺える。^⑪この演出は、開発独裁に対する人権外交の問題など今日まで、西洋世界のオリエンタリズム的自己表象の重要な要素を成している。

以上の諸点をふまえて、本稿は、キンダーガルテンの南アフリカ経験を、「シティズンシップ」の観点に立つて考察する。以下ではまず、「シティズンシップ」に対するキンダーガルテンの関心について、その初期の状況を検討する。次いで、中国人労働者導入問題を一つの契機として「白人国家」の創出に、連邦結成を一つの契機として帝国ニコモンウェルスの創出に課題がシフトしていく様子を探り、メンバーの「シティズンシップ」観の変化をたどる。更に、その帝国再編への関与と「シティズンシップ」との関係についても問題を整理したい。

- ① L. Thompson, *The Unification of South Africa 1902-1910*, Oxford, 1960.
- ② M. Legassick, 'British Hegemony and the Origins of Segregation in South Africa, 1901-1914', Seminar Paper, Institute of Commonwealth Studies, University of London, London, 1972-1973; Reprint, in: W. Beinart and S. Dubow (eds.), *Segregation and Apartheid in Twentieth-Century South Africa*, London, 1995; S. Marks and S. Trapido, 'Lord Milner and the South African State', *History Workshop* 8 (1979); S. Dubow, 'Colonial Nationalism: The Milner Kindergarten and the Rise of South Africanism, 1902-1910', *History Workshop Journal* 43 (1997). 南アフリカ連邦結成自体の研究史にめぐれば、拙稿「南アフリカ連邦結成と『和解』の創出」『史料』八五・三(二〇〇二年)一―三頁。以下も参照。拙稿「アハルト・ヘーエンウォーラー・ステイン」川北稔編『ウォーラー・ステイン』講談社、二〇〇一年、一四三―一四七頁。
- ③ W. Nimocks, *Milner's Young Men: The Kindergarten in Educational Imperial Affairs*, London, 1970; J. E. Kendle, *The Round Table Movement and Imperial Union*, Toronto, 1975. 邦語では、木村和男「ヘーリス帝国連邦運動と自治植民地」創文社、二〇〇〇年、一四頁。
- ④ A. May, 'The Round Table, 1910-66', Ph.D. Thesis, University of Oxford, Oxford, 1995, p.4. この世論形成の特色は、匿名性であった。例えば、編集長(一九二〇―三四年)J・タウは、「……『ラウンド・テーブル』誌の」位置は、「『一九世紀』誌等の評論誌とは全く異なります。われわれの記事は匿名であり、誰が執筆するとしても、それは『ラウンド・テーブル』誌総体の見解です。この特色ゆえ、われわれは影響力を保つてゐるのです。……」と書き残している。Dove to Brand, 23 June, 1933, in: *Ibid.*, p.6. 邦語では、以下が思想的影響力に言及している。木畑洋一「帝国の残像——ニコモンウェルにかけた夢——」山内昌之・増田一夫・村田雄二郎編『帝国とは何か』岩波書店、一九九七年、二〇九―二二頁。
- ⑤ W. Maritz, 'Memorandum of Conversations Which Took Place between a Few English and South African Friends at Intervals during the Summer of 1909', in: May, 'Round Table', pp.40-41.
- ⑥ 例えば邦語では、栗本英世・井野瀬久美恵編『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ——』人文書院、一九九九年。
- ⑦ メンバーの著書としては例えば、L. Curtis (ed.), *The Commonwealth of Nations: An Inquiry into the Nature of Citizenship in the British Empire, and into the Mutual Relations of the Several Communities*

Thereof, London, 1916.

- ⑨ 例 レ マ Legassick, 'British Hegemony', Marks and Trapido, 'Lord Milner', B.M. Magubane, *The Making of a Racist State: British Imperialism and the Union of South Africa, 1875-1910*, Trenton, 1996, pp.251-331. 邦語では「市川承八郎『イギリス帝国主義と南アフリカ』晃洋書房、一九八二年、一〇四—一二九頁。且祐介「文明・経済性・統治——今世紀初頭の英領南アフリカ政策をめぐって——」『東海大学教養学部紀要』一九(一九八八年)。松野妙子「南アフリカ人種差別土地立法の起源——一九一三年の『土地法』についての一考察——」油井大三郎他『世紀転換期の世界——帝国主義支配の重層構造——』未来社、一九八九年。前川一郎「南アフリカ連邦の形成とイギリス『原住民政策』」『歴史学研究』七六六(二〇〇二年)。

第一章 ミルナー・キンダーガルテンの登場

一九九七—一九〇五年、イギリス帝国の南部アフリカ支配の現地最高責任者であったミルナーが、白人の自治に対して多大な関心を寄せていたことは、疑問の余地がない。このことは、第二次南アフリカ戦争の初期より確認できる。例えば、ミルナーは一九九九年、「……『イギリス帝国の南部アフリカ支配の』究極の目的は、よく扱われ、公正に統治された黒人労働力によって支えられた、自治の白人共同体「を創ることです」……」と書き残している。こうしたミルナーの関心は、白人を対象とする「シティズンシップ」涵養へのキンダーガルテン自身の関心とも共鳴していた。例えば、メンバーの中心人物カーティスは一九〇〇年、「……問題群の処理に何ら意見を持たない人々に対して、効率的行政を恒久的に施すよりも、わたしはこの国を、市民「シティズン」のための学校と捉えたい。……」と記している。しかし、「黒人労働力」の問題に傾斜するあまり、南アフリカ連邦結成をめぐる先行研究が、「自治の白人共同体」の意味を十分に探ってこなかっ

- ⑥ 例 レ マ J. Harris, *Private Lives, Public Spirit: Britain 1870-1914*, Oxford, 1993. 邦語では「小関隆編『世紀転換期イギリスの人びと——アンソニー・ヘンティン・ヘンティン——』人文書院、二〇〇〇年。

- ⑩ N. Owen, 'British Progressives and Civil Society in India 1905-1914', Seminar Paper, Kobe Institute, Kobe, 2003. 民間公共団体への依存度を高める「モンパールの現況については、例 レ マ W.D. McIntyre, 'Commonwealth Legacy', in: J.M. Brown and Wm.R. Louis (eds.), *The Oxford History of the British Empire vol. 4: The Twentieth Century*, Oxford, 1999, pp.700-702.

- ⑪ 例えば邦語では「本田毅彦『インド植民地官僚——大英帝国の超エリートたち——』講談社、二〇〇一年、八六—一〇〇頁。

キンダーガルテンの経歴

南ア滞在期間	南ア滞在中	帰国以降
1901-1943	トランスヴァール総督府（1901-07）→連邦結成協会連合機関誌委員会委員長→議員（1910-20、21-36）、内務・保健・教育相（1921-24）、鉱業相（1933-36）→南ア総督（1937-43）	
1903-1911	ヨハネスブルク市役所（1903-07）→トランスヴァール入植問題委員会委員長（1907-11）	『ラウンド・テーブル』誌編集長（1920-34）
1899-1910	ミルナー秘書（1900-01）→ヨハネスブルク市役所（1902-04）→トランスヴァール総督府（1904-06）→トランスヴァール植民地議会議員（1907-10）、連邦結成協会連合幹事長	（ラウンド・テーブルの中心人物）
1900-1911	ミルナー秘書（1900-03）→ラント原住民労働協会（1903-11）	会社社長（カナダ、1912-32）
1901-1907	ヨハネスブルク市役所（1901-02）→トランスヴァール総督府（1902-07）	造船会社社長（1910-40）
1901-1910	ミルナー秘書（1901-05）→『ヨハネスブルク・スター』紙編集長（1905-10）	『タイムズ』紙編集長（1912-19、23-41）、『ラウンド・テーブル』誌編集長（1919-20、42-44）
1902-1965	ヨハネスブルク市役所（1902-05）→南ア高等弁務官法律アドバイザー（1905-10）、トランスヴァール植民地議会議員（1907-10）→議員（1915-23）→最高裁判所判事（1939-44）	
1905-1910	セルボーン秘書	イギリス南ア会社社長（1937-55）
1901-1930	ミルナー秘書（1901-03）→議員（1910-20）	（農業）
1902-1909	トランスヴァール・オレンジ川植民地間連絡会議	（銀行家）
1905-1909	トランスヴァール・オレンジ川植民地間連絡会議（1905-08）、トランスヴァール貧困問題委員会（1907-08）→『ステイト』誌編集長（1908-09）	『ラウンド・テーブル』誌編集長（1910-16）→駐米大使（1939-40）

たことも事実である。以下ではまず、「シテイズンシップ」に対するキンダーガルテンの関心について、その初期の状況を検討したいと思う。

一八九九―一九〇五年、メンバー一人は個別に、目的も様々に南アフリカに渡ってきた。表一は、キンダーガルテンの経歴を示す「南ア（フリカ）に渡るまで」の項目にあるように、ある者はミルナー秘書として、ある者はシテイ帝国義勇軍の一員として、またある者は植民地省の官僚として渡った。しかし一人は、縁故により現地でイギリス

表1 ミルナー・

	生没年	父親	南アに渡るまで
P・ダンカン	1870-1943	小作農	フィランソロピー活動(ロンドン)→内 国歳入庁→ミルナー秘書
J・ダヴ	1872-1934	保険会社 支社長	(学生)
L・カーティス	1872-1955	教区牧師	フィランソロピー活動(ロンドン)→自 由統一党議員秘書→シティ帝国義勇軍
F・ベリー	1873-1935	地主	植民地省
L・ヒキンズ	1874-1940		シティ帝国義勇軍
G・ロビンソン	1874-1944	銀行家	植民地省
R・フィータム	1874-1965	教区牧師	ロンドン州会法律スタッフ
D・O・マルコム	1877-1955	銀行家	植民地省
H・ウィンダム	1877-1963	男爵	(学生)
R・H・ブランド	1878-1963	子爵	(学生)
P・カー	1882-1940	侯爵	(学生)

出典：May, 'Round Table', pp.456-468, etc.

カ連邦結成時メンバーのライヴァルとなる(第三章参照)。ただし、揶揄の他称はまもなく、メンバーの自称ともなったようである。^⑦このように、キンダーガルテンをグループとする認識もまた、二〇世紀初めの南アフリカに生じた。

帝国のトランスヴァール再建のスタッフとなり、次第に一つのグループを形成していく。^④「キンダーガルテン」の異称について、命名の由来は諸説あるが、^⑤とも有力なのは、ケープのイギリス系自由主義者J・X・メリマン説である。例えば、W・B・ウォースフォールドは、メリマンが一九〇二年九月、ケープ植民地議会の演説において揶揄的に用いたことを起源としている。^⑥なお、一九〇八一〇年、同植民地首相を務めるメリマンは、南アフリ

しかし他方で、南アフリカに渡る以前についても、メンバーの経歴には共通の傾向が確認できる。共通項の第一は、スコットランド出身のD・O・マルコムを除く一〇人が、イングランド出身であったことである。なお、表一の「生没年」の項目にあるように、生年の大半は一八七〇年代に集中している。また、「父親」の項目にあるように、出身階層の大半は、貴族、銀行家、教区牧師等広義の教養層であった。共通項の第二は、P・ダンカン、G・ロビンソンを除く九人が、オックスフォードのニュー・カレッジ出身であったことである。ダンカン、ロビンソンについても、各々ベリオル・カレッジ、マグダレン・カレッジ出身であり、オックスフォード出身である点は全員に共通する。

史料上、詳細にたどるのは難しいが、こうした在英時の経歴が、「シテイズンシップ」に対するキンダーガルトンの関心に影響を与えたことは確実である。とくに、オックスフォード経験は決定的であつたに違いない。当時のオックスフォードでは、CSU（キリスト教社会同盟）の活動、あるいはT・H・グリーン、F・H・ブラッドレー等の理想主義哲学が学生、ことに将来帝国建設に関与する人材に多大な影響力を有していた。^⑧キンダーガルトンもこの環境のもと、宗教と政治、次いで救貧と社会改革の問題に関心を寄せた。メンバーのダンカン、カーティス、L・ヒキンズ、R・フィータムの四人は、オックスフォードを卒業すると、ロンドンでフィランソロピー活動に専念することとなる。四人に深い感銘を与えたのは、O・ヒルの労働者住宅供給事業であつた。カーティスは、「……裏庭付きの質素な一戸建てのほうが、いまロンドン州会が建設している近代的なフラットよりましです。ドアと階段が居住者の意のままになり、家族の調和を保つことができるからです。……」というヒルの言葉を、強く記憶にとどめている。^⑨

一八九九—一九〇五年、南アフリカに渡ると、キンダーガルトンのメンバーは、新天地の印象を数多く書き残した。ただし、その題材、内容は、南アフリカ景観の文学的表象「フェルトのロマンス」に依拠する部分が大きい。^⑩例えば、題材の一つは、ケープ内陸部のカルー高原である。カーティスは友人に、「……いままだ、列車はカルー高原を走っています。ここはまるで、神の怒りが落ちたかのような場所です。……」^⑪と書き送っている。また、P・カーは家族に、「……〔朝

は「天地創造の朝のように、本当に恐ろしい場所〔で、涼しい夕方には〕すべてが静まり返り、地平線は蛇のように遠くでくねって、囲いも堤防もなく、不毛の地における一筋の明るい縞のようです。日没は「イングラッド」北部出身者の眼には新鮮に映ります。……」と書き送っている。こうしたカルー高原の、キリスト教的怒り、恐怖のシンボリズムは、元は当地のイギリス系作家O・シュライナーの小説『アフリカ農場物語』(一八八三年)の所産である。^⑮エキゾティック、かつ理想郷を建設すべき「新しい土地」のイメージは、メンバーの心性にフィットした。

「フェルトのロマンス」は、キンダーガルテンの人種観の形成にも一役買う。つまり、新天地に関するメンバーの印象において、有色人種が目立つことは皆無であった。他方、「ボーア人」に対する共感的眼差しは、敵対していた第二次南アフリカ戦争時であっても一貫している。例えば、カーティスは母親に、「……〔ボーア人の農家の〕机上には家族用の聖書がありました。実際世界中どこへ行っても、テュートン人の農家は同じだそうです。……」と書き送っている。また、

家族には、「親ボーア派」の歴史家G・M・シールの読書案内をしたあと、「……ボーア人について知れば知るほど、彼らが人間として一層優れている、と思うようになります。彼らは、枝葉を付けず地中に根を伸ばし続ける榎の木のです。……」^⑰とも書き送っている。更に、ミルナーには、「……わたしは、あなたよりずっと親ボーア派である、いつも言うてきました。……」^⑱とも述べた。こうしたボーア人観は、農村的人間のステレオ・タイプを全く脱していないとはいえ、無教養、狂信的というイギリス人の伝統的侮蔑感とは一線を画している。^⑲このようにメンバーは、「フェルトのロマンス」のイメージを借り、有色人種を排除する一方、ボーア人についてはイギリス系住民に準じて対処する視角を形成した。

以上の経緯により、イギリス帝国のトランスヴァール再建のスタッフとなると、キンダーガルテンのメンバーは、主にボーア人を対象とする救済と社会改革の領域に関与した。例えば、カーティスはミルナー秘書(一九〇〇―〇一年)の時期より、当地の金鉱業の中心であったヨハネスブルクの市政に携わっている。同市は第二次南アフリカ戦争末期、二つの困難に直面していた。第一の困難はインフラ問題である。同市のインフラはトランスヴァール共和国治下、戦前においても

未整備であった。例えば交通については、貧弱な民間経営、鉄道馬車の段階にあった。こうした未整備のインフラも、戦争の結果完全に荒廃する。^{②①}

第二の困難は「プア・ホワイト」問題である。同市には戦前より、大量のボーア人が流入し、荷牛車・辻馬車の御者、建設業に従事して都市の下層を形成していた。こうしたボーア人は、戦争の結果一層の困窮状態に陥る。^{②②}この時期、イギリス軍とともに同市に入ってきた複数のイギリス人が、プア・ホワイトの状況を克明に描写している。その一人J・R・マクドナルドは、単身労働者の生活について次のように記す。「……ヨハネスブルクが、国家の有機的な一部となっていく都市社会であることを認めなかった点について、クリューガー「トランスヴァール共和国」大統領は全く正しかった。街中の賃金労働者の居住地域を歩けば、数多くの食堂を見ることができる。ヨハネスブルクで家にいる労働者を探し出せば、その家は単に、同僚と共有する寝室に過ぎないことがわかる。家族生活——国家は本来、その基礎の上にあるのだが——は、大半の人々の間では存在しているとは言いがたい。黄金の町では、人々は家ではなくベッドを借りているのである。^{②③}……」カーティスの課題は、以上二つの困難を有機的に解決することであった。

「ヨハネスブルクの、現在、未来の市域に関する覚え書き」（一九〇一年九月三日付）と題する文書^{②④}において、カーティスは再建計画を提示する。ヨハネスブルクの市域に関しては当時、分割すべしとの意見が支配的であった。戦争が小康状態に入った結果、ボーア人の再流入が起こり、都市機能が飽和したためである。しかしカーティスは、こうした分割論に異を唱える。確かに市域の策定は、経済と行政の効率性に従うべきであるが、他方で階級による社会生活の分離も危険である。市街地のコミュニティと近郊の田園的ソサエティとを繋ぐことが肝要である、とカーティスは説く。次いで、財政、下水道、公衆衛生、飲酒・賭博、市街電車、電灯の各項目について、再建の具体策を提示する。とくに市街電車を、近郊の庭付きの一戸建てと職場とを繋ぎ、健康・教育・道徳上の利点を有する、と重視する点には、ヒルの影響が窺える。このようにカーティスは、救済と社会改革の対象としてボーア人労働者層を明確に措定した。

しかし、「シティズンシップ」の涵養に関しては、エリート志向の限界が垣間見える。カーティスは「覚え書き」を、「最大の障害は、……一流の能力と経験を有する人間に、仕事と責任の共有を求めること」^⑤と締めくくる。つまり、「シティズンシップ」涵養の対象としては、イギリス人資本家層しか指定しないのである。カーティスの狙い通り、「覚え書き」は、「一流の人間」のあいだには広範な議論を巻き起こした。「トランスヴァール鉱業会議所の回答」(一九〇一年一月一日付)^⑦は、「覚え書き」の総論には賛意を示しつつも、階級による社会生活の分離は不可避である、と説く。この「回答」に対してカーティスは、「総督府が採るべき真の政策は、……諸階級を繋ぎ合わせ、法が定める各々の利益を保護すること」と反論している。こうした議論は、一層の議論を巻き起こした。

カーティスのエリート志向は、一面ではミルナーの官僚志向とも通じている。例えばミルナーは、イギリス本国の政治体制が官僚の専門知識を軽視していることを次のように批判している。「……経験に裏打ちされた知識と、精度の高い情報とに対する敬意の欠如が全体に拡がり、上流階級と統治構造の心理、判断に影響を及ぼしています。……」^⑧トランスヴァール再建に際しての「シティズンシップ」の涵養は、こうしたエリート志向、官僚志向のために、著しい限界を示していた。

以上小括すると、キンダーガルテンのメンバーが、白人を対象とする「シティズンシップ」の涵養に多大な関心を寄せていたことは、滞在のきわめて初期より確認できる。また、救済と社会改革の対象としてボーア人労働者層を指定していたことも明確である。しかし、トランスヴァール再建時の「シティズンシップ」涵養に際しては、エリート志向の限界が存在した。この矛盾を克服し、「シティズンシップ」観をクリアにすることは、メンバーにとって次の段階の問題となる。

① Milner to FitzPatrick, 28 November, 1899, in: C. Headlam (ed.),

The Milner Papers vol. 2: South Africa 1899-1905, London, 1933, p.

35.

South Africa, Oxford, 1951, p.168.

③ 例へば Legassick, 'British Hegemony', Marks and Trapido, 'Lord Milner'.

② Curtis' Diary, 24 November, 1900, in: L. Curtis, *With Milner in*

④ グループ形成の基軸は、二つ存在した。第一の基軸は、上司である

- ミルナーとの紐帯である。例えば、キンダーガルテンと親しかった作家 J・バハーン (一九〇一—〇三年、南アフリカに滞在) は、この紐帯の中心を「ミルナーとその信条への忠誠心」に定めている。^⑧ J. Buchan, *Memory Hold the Door*, London, 1940, p.99. 他、メンバーの J・ボキンスは「ミルナーの魅力は、帝国の問題に接する」前向きな「献身的態度」にあり、^⑨ 'At New College', *National Review* 107 (1936), p.608. 第二の基軸は「同僚であるメンバー相互の紐帯である。やはりキンダーガルテンと親しかった建築家 H・ベイカー (一八九一—一九二三年、南アフリカに滞在) 設計のムーネ・ハウスに、大半が独身であったメンバーが共同生活した。H. Baker, *Architecture & Personalities*, London, 1944, pp.49-50.
- ⑤ カートイスはトランスヴァールの弁護士、^⑩ フリオットや、^⑪ メンバーの H・ウィングダムはミルナー自身を母親と見ていた。^⑫ Curtis, *With Milner*, p.342; Nimocks' Interview with Wyndham, 8 March, 1960, in: Nimocks, *Milner's Young Men*, p.44.
- ⑥ W.B. Worsfold, *The Reconstruction of the New Colonies under Lord Milner* vol. 2, London, 1913, p.219.
- ⑦ Nimocks' Interview with Wyndham, 8 March, 1960, in: Nimocks, *Milner's Young Men*, p.44.
- ⑧ 「この間、一歩引くべきで、R. Symonds, *Oxford and the Empire: The Last Lost Cause?*, Basingstoke, 1986.
- ⑨ Curtis' Foreword, in: W.T. Hill, *Octavia Hill: Pioneer of the National Trust and Housing Reformer*, London, 1956, p.14.
- ⑩ 「トーマス・ドロップ」は、B. Schwarz, 'The Romance of the Veldt', in: A. Bosco and A. May (eds.), *The Round Table: Empire Commonwealth, and British Foreign Policy*, London, 1997, 頁 1-2. 参照: J. Buchan, *The African Colony: Studies in the Reconstruction*, Edinburgh, 1903, pp.79-186.
- ⑪ Curtis to His Friends, 22 February, 1900, in: Curtis, *With Milner*, p.7.
- ⑫ Kerr to His Family, 1905, in: J.R.M. Butler, *Lord Lothian (Philip Kerr) 1882-1940*, London, 1960, p.12.
- ⑬ 他、他は O. Scheiner, *The Story of an African Farm*, London, 1883, p.1.
- ⑭ Curtis to His Mother, 1 March, 1900, in: Curtis, *With Milner*, p.10.
- ⑮ 雑誌「探検」の題名「イブ」。
- ⑯ G.M. Theal, *South Africa*, London, 1894.
- ⑰ Curtis' Diary, 14 December, 1900, in: Curtis, *With Milner*, p.180.
- ⑱ Curtis to Milner, 29 September, 1906, in: D. Lavin, *From Empire to International Commonwealth: A Biography of Lionel Curtis*, Oxford, 1995, p.77.
- ⑲ 例、他は「……そのボーア農場主は、無益な怠惰そのものであった。……彼は完全に無教養であり、聖書のあらゆる言葉を当に狂信的に信じていた。……本を開かず、新聞を読んだり決断しなかった。……」J. R.S. Churchill, *Men, Mines and Animals in South Africa*, London, 1893, p.94.
- ⑳ C. Van Onselen, *Studies in the Social and Economic History of the Witwatersrand 1886-1914 vol. 1: New Babylon*, Johannesburg, 1982, pp.165-172.
- ㉑ FitzPatrick to Wernher, 25 July, 1900, in: A. Dunning and B. Guest (eds.), *FitzPatrick: South African Politician Selected Papers, 1888-1906*, Johannesburg, 1976, p.274.
- ㉒ Van Onselen, *Studies vol. 2: New Nineteenth*, Johannesburg, 1982, pp.

113-125.

- ②③ L.S. Amery, *The Times History of the War in South Africa 1899-1902 vol. 4*, London, 1909, pp.149-150: FitzPatrick to Wernher, 5 July, 1902, in: Durniny and Guest, *FitzPatrick*, p.333. 参考: J. Hyslop, 'A Scottish Socialist Reads Carlyle in Johannesburg Prison, June 1900: Reflections on the Literary Culture of the Imperial Working Class', *Journal of Southern African Studies* 29-3 (2003).

- ②④ J.R. MacDonald, *What I Saw in South Africa*, London, 1902, p. 103.

- ②⑤ Curtis, 'Memorandum on the Present and Future Boundaries of Johannesburg', 23 September, 1901, in: Curtis, *With Milner*, pp.

258-273.

- ②⑥ *Ibid.*, p.273.

- ②⑦ Transvaal Chamber of Mines' Reply, 1 October, 1901, in: *Ibid.*, pp.273-283.

- ②⑧ Curtis, 'Report of the General Purposes Committee of the Town Council', 5 October, 1901, in: *Ibid.*, pp.283-297.

- ②⑨ R. Currie, 'Memorandum', 1 October, 1901, in: *Ibid.*, pp.298-300; G.A. Turner, 'Remarks on the Memorandum Regarding the Present and Future Boundaries of Johannesburg', in: *Ibid.*, pp.300-303.

- ②⑩ Milner to Cecil, 16 May, 1903, in: Headlam, *Milner Papers vol. 2*, p.448.

第二章 中国人労働者導入問題と「白人国家」の認識

一九〇四—〇六年の中国人労働者導入問題を一つの契機として、キンダーガルテンのメンバーは、課題を「白人国家」の創出にシフトしていく。この創出には、二つの側面が存在した。一つの側面は、有色人種を居留地に隔離し、その政治的権利を剝奪することであり、もう一つの側面は、白人国民の「シティズンシップ」を涵養することである。この内、前者については、レガシックの先行研究が存在する。レガシックは、一九〇三—〇五年の南アフリカ原住民問題委員会が答申した有色人種隔離論を当時、カーティスが引き継ぎ、ダンカンが一九一三年の原住民土地法に橋渡しした、としている^①。しかし、「シティズンシップ」の問題について、先行研究は存在しない。以下では、「白人国家」創出とこの問題との関係を探り、メンバーの「シティズンシップ」観の変化をたどっていきたい。

二〇世紀初め、イギリス帝国のトランスヴァール再建の焦点はウィットウォーターズラント(ヨハネスブルク近郊。以下、

ラントと略)金鉱業の再建にあり、その最大の課題は、低賃金労働力の確保であった。しかし、第二次南アフリカ戦争の混乱もあって、アフリカ人労働者の徴募は困難を極め、また、白人を低賃金で雇用することにも抵抗感は強かった。こうした状況にあって、第三の選択肢として浮上したのが、中国人労働者の導入である。ただし、当局は導入に条件を付した。中国人労働者に対して、熟練労働への従事を禁止するとともに、契約満了時には中国に帰還するよう命じたのである。^②以上の条件は、中国人が多様な職業に就き、永住することを未然に防止して、白人の社会的、数的優位を維持するためのものであった。例えば、導入を推進したミルナーは、「アジア人の導入」を「アジア人の移民」としない配慮を書き残している。^③

しかし、こうした配慮にもかかわらず、トランスヴァールのボーア人Ⅱアフリカーナは中国人労働者の導入自体に反発した。とくにその指導者は、代わりにプア・ホワイトを高賃金で雇用するよう鉱業資本に求める。例えば、指導者の一人 J・C・スマッツは、ケープのイギリス系自由主義者メリマンに、「……トランスヴァールの困難な労働問題に対する最善の解決策は、われわれの貧しい南アフリカ人が仕事を分け合う白人のラント〔を創ること〕です。利潤は、わたしとしては問題外ですし、時間が経てば一般に受け容れられていくでしょう。……」と書き送っている。このように、アフリカーナ指導者の主要な関心は、プア・ホワイトの救済にあったと見るべきである。中国人脱走者が引き起こす一般犯罪への警戒等もあいまって、導入への反発は日増しに広がり、第二次南アフリカ戦争に敗北したアフリカーナの政治的リヴァイヴァルとも化していく。反発はやや異なった角度からイギリス本国でも巻き起こり、一九〇五年、ミルナーは失脚した。^⑤そのあと、本国のバルフォア統一党政権も退陣し、後継のキャンベルⅡバナマン自由党政権が、戦争以降直轄植民地化していたトランスヴァールに対して、責任政府(議院内閣制の自治権)の授与に動く、キンダーガルテンの多くも職を退き、野に下る。

この一件は、キンダーガルテンに「白人国家」の認識を付与した。例えば、カーティスは、トランスヴァール総督府退

職時の講演(一九〇六年一月三〇日)において、次のように話を切り出す。「……おそらく、わたしの仕事のなかでもっとも困難な部門は、この国の将来にとつてもっとも重要な、アジア人問題に関する部門でした。その部門の経験は、……トランスヴァールを「今後とも」白人国家としていくことに帰結しました。そうすることによってこの国は、「アジア系移民の人口が多い」モーリシャスやジャマイカのような国々にふりかかった運命から逃れることができるでしょう。……」^⑥この「白人国家」の認識と、スマッツの「白人のラント」の志向とが共鳴していることは明白である。講演の前年(一九〇五年)末より、ラント経済は不況に陥り、アフリカーナの労働事情はますます悪化した。キンダー・ガルテンのメンバーであるカーティス、フィータム、カーの三人は、講演の翌月(一九〇六年二月)、トランスヴァール貧困問題委員会を組織し、プア・ホワイト施策に本格的に着手する。^⑦この施策を通して、スマッツはメンバーとの交流を深め、最終的にはその支持者となった。^⑧

カーティスの講演はもう一点、責任政府授与に関連して自治の問題に言及している点も興味深い。カーティスはまず、「自治はシステムが拠って立つ偉大な基礎である」^⑨と称揚する。トランスヴァールは行政の理想郷であるが、行政はわずかしかなし得ない。カーティスはここで、「個人的意見は差し挟まない」^⑩と述べ、「中立」のスタイルに転じる。しかし同時に、「未来を見据えるためには過去を見据えることが必要である」^⑪とも述べ、話題を国際比較に移す。南米諸国には進歩がなく、意味なき堂々巡りと終わらなき混乱とが存在するのみである。他方、英独米の経験は学ぶに値する。大衆は自治を渴望するが、空論にも走りやすい。英独米では、大衆を「立法過程」に参画せしめることによって、問題を解決している。ここに「既成の教義」、国家の進歩の秘密がある、とカーティスは小括する。^⑫

話題はこのあと、自治の将来の目標となるべき南アフリカ連邦結成に移っていく。カーティスは、他地域を思い遣る利他主義を称揚する一方、一八五〇年代末のケープ植民地総督G・グレイ、七〇年代半ばの本国植民地相カーナヴォン、八〇年代初めのアフリカーナ同盟、九〇年代のケープ植民地首相C・J・ローズと歴史的系譜をたどって、連邦結成の必然

性を示唆した。^⑮なお、連邦結成はこの時期以降、キンダーガルテンの主要な関心事となる（第三章参照）。以上のように、カーティスは、自治への関心を明確に示した。同時に、国際比較を用いて、あるいは歴史的系譜をたどって話題を特定の方角に誘導する一方、中立を強調して、「聞き手が自分で考える」という「シティズンシップ」涵養のスタイルをも確立したのである。また、ドイツの経験、アフリカーナ同盟等を列挙するのは、アフリカーナの聴衆に配慮したものといえる。

「白人国家」の認識は、「シティズンシップ」涵養の対象拡大にも帰結した。例えば、メンバーのJ・ダヴは、トランスヴァール入植問題委員会委員長（一九〇七年）として各地を巡り、イギリス系農業移民を現地指導した。この様子について、ダヴは家族に、次のように書き送っている。「……わたしが自らに課したルールは、約束をしないことです。会合の冒頭、代弁者はいくらか尊大に、地主が小作人のところに来て談笑するのはよいことだ、と語りました。そこで、わたしは訂正し、われわれは地主と小作人ではなく、入植計画のパートナーであり、成功のためにともに協力しなければならぬ、と言いました。すると彼らは、予期していなかった地代を払わなければならなくなったというのに、大いに喜んだのです。われわれは一日中語り明かしました。……」^⑯こうした動きと並行して、ダヴはアフリカ人の怠惰への蔑視、あるいは人種混交、「アジア人問題」への懸念も深めている。^⑰「シティズンシップ」涵養の対象拡大と「白人国家」の認識とは、表裏一体の関係にあった。

しかし、ダヴの場合、ボーア人観になお一定の限界があることは否めない。例えば、ダヴは家族宛書簡において、オランダ領時代のケープ建築を礼賛している。^⑱この建築を誇る当地のボーア人IIアフリカーナ農場主は、イギリスに対して一貫して協力的であった。他方、トランスヴァールの非協力的な零細農民については、次のように否定的である。「……彼らの一人はビターエンダー（第二次南アフリカ戦争時のボーア人抵抗者）で、われわれとの協力を一切拒否しました。彼はボータ（アフリカーナ指導者）以外、誰とも協力しないでしょう。……」^⑲また、ローデシア旅行時には、イギリス系、アフリカーナを問わず、都市にいる貧困層の開拓者一般に対しても侮蔑感を示している。^⑳

以上小括すると、中国人労働者導入問題を一つの契機として、キンダーガルテンのメンバーは、課題を「白人国家」の創出にシフトしていく。このシフトは、自治への関心の明確化、スタイル確立、あるいは対象拡大等、「シティズンシップ」涵養の深化とも対を成していた。しかし、帝国と「白人国家」の関係についてメンバーが認識を深めるには、もう一段階を要することとなる。

- ① Legassick, 'British Hegemony', pp.49-58.
- ② 例へば P. Richardson, *Chinese Mine Labour in the Transvaal*, London, 1982, pp.8-46. 邦語では「木畑洋一『中国人奴隷』とイギリス政治——南アフリカへの中国人労働者導入をめぐる——」油井他『世紀転換期の世界』、p.81—89頁。且祐介「二〇世紀初頭イギリス帝国政策の変容——南アフリカの中国人労働者問題を中心に——」『東海大学教養学部紀要』二二(一九九二年)、一八六—一八八頁。
- ③ Milner to Farrar, 21 April, 1903, in: Headlam, *Milner Papers vol. 2*, p.461.
- ④ Smuts to Merriman, 5 May, 1906, in: W.K. Hancock and J. Van der Poel (eds.), *Selections from the Smuts Papers vol. 2: June 1902-May 1910*, Cambridge, 1966, p.270.
- ⑤ 木畑「『中国人奴隷』」九〇—一〇二頁。且「二〇世紀初頭イギリス帝国政策」、一九五—一九八頁。ミルナーは離任に際して、「……イギリス人とオランダ人は、イギリスと南アフリカが協力し合う帝国国家への忠誠において結合します。……真の帝国主義者は最良の南アフリカ人でもあるのです。……」と発言し、「オランダ人」の問題への配慮を明確にした。Milner's Speech in Johannesburg, 31 March, 1905, in: Lord Milner, *The Nation and the Empire: Being a Collection of Speeches and Addresses: With an Introduction by Lord Milner*, G.C.B., London, 1913, p.91.
- ⑥ Curtis' Speech in Johannesburg, 30 October, 1906, in: Curtis, *With Milner*, p.348.
- ⑦ Van Onselen, *Studies vol. 2*, pp.134-135; Dubow, 'Colonial Nationalism', p.65.
- ⑧ 初期の交流については例へば Curtis to Smuts, 25 April, 1906, in: Hancock and Van der Poel, *Smuts Papers vol. 2*, pp.260-263. 以上を参照。L. Thompson, 'The Compromise of Union', in: M. Wilson and L. Thompson (eds.), *The Oxford History of South Africa vol. 2: South Africa 1870-1966*, Oxford, 1971, p.341.
- ⑨ Curtis' Speech in Johannesburg, 30 October, 1906, in: Curtis, *With Milner*, p.350.
- ⑩ *Ibid.*
- ⑪ *Ibid.*
- ⑫ *Ibid.*, p.351.
- ⑬ *Ibid.*, pp.352-354.
- ⑭ イギリス系農業移民は、元はミルナーが導入を推進した。なお、この移民を入植初期に現地指導したのは、キンダーガルテンと親しかつたバハーン(第一章註④参照)である。P. Rich, 'Minerism and a Ripping Yarn: Transvaal Land Settlement and John Buchan's Novel *Prester John* 1901-1910', in: B. Bozoli (ed.), *Town and Coun-*

Inside in the Transvaal: Capitalist Penetration and Popular Response, Johannesburg, 1983, pp.415-419. 以下参照。Buchan, *African Colony*, pp.255-283.

^⑨ Dove to His Sisters, 16 June, 1907, in: R.H. Brand (ed.), *The Letters of John Dove*, London, 1938, p.3.

^⑩ Dove to Hunt, 10 November, 1907, in: *Ibid.*, pp.13, 15.

^⑪ Dove to Pinching, 20 December, 1908, in: *Ibid.*, p.21.

第三章 南アフリカ連邦結成と「コロニアル・ナシヨナリズム」の認識

一九〇九—一一年、イギリスに帰国すると、キンダーガルテンのメンバーは、帝国全体の再編に際しても中心的役割を担う。メンバーが課題をこの推進にシフトしたことには、二つの契機が存在した。一つの契機は、イギリス本国の評論家R・ジェブの思想的影響であり、もう一つの契機は、南アフリカ経験である。この内、前者については、メイ、デュボウ等の先行研究が存在する。こうした研究によると、ジェブは白人定住植民地において、分離独立志向の「トライバル・ナシヨナリズム」を排し、帝国を上位に戴く「コロニアル・ナシヨナリズム」を確立するよう訴えた^①。また、本国「植民地関係を、支配—被支配の関係から対等の関係（ブリタニック同盟／帝国連邦）へと移行せしめるよう提唱する^②。以上のジェブの構想は、キンダーガルテンにも影響を与えた、ということになる^③。かかる影響関係が存在したこと自体は、否定し難い。例えば、あとで述べるメンバー執筆の『セルボーン覚書』にも、ジェブの著書『コロニアル・ナシヨナリズムの研究』の引用が確認できる^④。しかし、もう一つの契機である南アフリカ経験について、先行研究は存在しない。以下では、とくに帰国直前の南アフリカ連邦結成への関与が、「コロニアル・ナシヨナリズム」認識の契機となった点を探る。また、この認識の深化と同時進行した、メンバーの「シティズンシップ」観の変化についてもたどっていきたい。

^⑮ ケープ建築礼賛は南アフリカ連邦結成に際して、白人間の文化統合の重要な表象となった。なお、この礼賛成立に貢献した中心的人物は、メンバーの共同生活の場ムート・ハウスの設計者ベイカー（第一章註④参照）である。拙稿『「和解」の創出』二〇一二年頁。

^⑯ Dove to Pinching, 18 September, 1907, in: Brand, *Letters*, p.10.

^⑰ Dove to His Sisters, August, 1909, in: *Ibid.*, pp.36-37.

先述のとおり、イギリス本国政府がトランスヴァールに対して責任政府の授与に動くと、キンダー・ガルテンの多くは公職を退き、同地域再建の実務より基本的に手を引いた。更に一九〇六年二月、授与が現実のものとなると、メンバーは野に在って連邦結成を推進しはじめる。カーティスは、「……〔責任政府授与は〕理に適っているが、もしほかの何事も実現しなければ、旧共和国〔トランスヴァール〕はケープ植民地、ナタールとの衝突に追い込まれ、南アフリカは再度戦争に突入するだろう。……」^⑤との言葉を残している。カーティスにとつて連邦結成とは、自身が再建に携わったトランスヴァールをイギリス帝国の下にとどめることを意味した。メンバーは一九〇六年一〇月、「隔週クラブ」を設立する。フイタムは、『南アフリカ連邦結成の諸問題』と題する講演において、設立の目的を連邦結成の推進と定めた。^⑥同クラブは、具体的政策課題について調査、分析、討論を行うシンクタンクである。例えば、ダンカン、ヒキンズは、F・S・オリヴァー『アレクサンダー・ハミルトン』(一九〇七年)^⑦を課題図書に据え、外国の先例に学んだ。ただし、同クラブは、自体の存在を隠す「秘密の委員会」(ロビンソン)であったため、活動内容の詳細を知ることが困難である。このように、「外国の先例に学ぶ」、あるいは「自体の存在を隠す」ことによって、メンバーは「シティズンシップ」の涵養を図った。しかし、こうした認識は、ケープの「コロニアル・ナショナリズム」に直面することによって一定の変化を見せる。イギリス領ケープ植民地は南部アフリカにおいて、白人開拓者の最初の入植地であり、また自治に関しても、イギリス領植民地随一の先進地域であった。一八五四年には代表政府(立法権)授与、一八七一年には責任政府授与を経ており、一八九三年によく自治を獲得したナタール、ボーア人の独立国家であったトランスヴァール、オレンジとは歴史を異にしている。ただし、ケープにおいても自治の当初は、政治に対する住民の無関心が蔓延していた。^⑧こうした状況が変化したのは、ミルナーが高等弁務官に就任し、第二次南アフリカ戦争への危機が累積していく一九世紀末である。変化には、二つの側面があった。一つの側面は、イギリス帝国を上位に戴きつつ、植民地の独自性をも主張する「コロニアル・ナショナリズム」の確立であり、もう一つの側面は、「シティズンシップ」の議論の登場である。この内、前者については、

P・バックナーの先行研究が存在するが、「シテイズンシップ」の問題については存在しない。だが実際には、この登場が、「コロニアル・ナショナリズム」の確立と対を成していたことは明白である。例えば、ケープのイギリス系作家シュライナーは、帝国主義的強権政治に対抗する手立てとして、都市と農村にアソシエイションを創る、メディアを使う、政治に影響を与える、の三点を住民に促している。こうした議論は、同時期の他地域には存在しなかった。^⑩

ケープの「コロニアル・ナショナリズム」が二〇世紀初め、どのように展開したかについても、先行研究は多くを語っていない。この時期、反発の対象はミルナーに集中した。例えば、一九〇二年、南部アフリカ諸地域の中央集権的統合の第一段階として、ミルナーがケープの自治停止を画策したとき、ケープ政界は猛反発し、画策を阻止した。この事件について、イギリス系自由主義者J・T・モルテノは、「……もしわれわれの陣営があつたなら、トランスヴァール、オレンジ川両植民地への自由な諸制度の導入も、南アフリカ連邦結成も無期限の延期となつただろうし、ミルナーの狂気の政策による避け難い攻撃によつて、イギリス国王とイギリス帝国は南アフリカを失う結果となつただろう。われわれは、……南アフリカの真の愛国者であつた。……」と述べている。ミルナーへの反発が、イギリス帝国への反発を意味していないことに留意したい。こうした立場を代表する人物は、「キンダーガルテン」の命名者メリマンである。メリマンは一九〇四年、スマッツに、「……善意に解釈しても疑いなく、利権を用いて連邦結成を企てるミルナー卿を見ると、屋根から下に向かって家を建てる計画を抱いた有名な設計者を思い出します。……」と書き送っている。かかるケープの「コロニアル・ナショナリズム」にいかに対応するかは、連邦結成に際して、メンバーの中心的課題となつた。しかし同時に、この対応を通して、メンバーはイギリス帝国全体の問題にも関心を示すこととなるのである。

キンダーガルテンは一九〇七年一月、連邦結成に関わる最初の重要な仕事として、『セルボーン覚書』を南部アフリカの各植民地政府に提示した。また、七月にはこの内容を、『ケープ・タイムズ』、『ヨハネスブルク・スター』等主要各紙に発表し、世論の喚起を図つた。しかし、メンバーは自身の関与を隠している。代わつて、ケープ植民地首相L・S・ジ

エイムソン、当地のアフリカーナ指導者F・S・マランの求めに応じて、南アフリカ高等弁務官セルボーンが所見を述べる、という形式を採用した。^⑮匿名性によって、「読者が自分で考える」スタイルを創り出そうとしたのである。

こうした「シティズンシップ」涵養の工夫は、随所に確認できる。同書は、「南アフリカ分断の歴史的要因」、「南アフリカ鉄道建設に関する分断の結果」、「南アフリカ財政に関する分断の結果」、「原住民・労働問題への分断の影響」、「経済状況への分断の影響」、「国家の拡大」、「国家機構の役割」、「近未来」、「概観」の九章より成っていた。一例として、「南アフリカ鉄道建設に関する分断の結果」の章を検討しよう。同章の分担執筆者は、当時トランスヴァール・オレンジ川植民地間連絡会議に勤務していたカーである。カーはまず、鉄道誕生以来の「歴史的系譜をたどり」、使用料等をめぐる地域間の対立、とくにデラゴア湾問題に焦点を当てる。金鉱を擁するトランスヴァールの外港の選択をめぐるでは、デラゴア湾を有するポルトガル領東アフリカとイギリス領のケープ、ナタールとの間に対立があり、トランスヴァール自体は鉄道使用料が安い前者に傾いていた。この対立は第二次南アフリカ戦争の一因ともなるが、戦争が終わっても問題は解決しなかった。

ここでカーは、「統計の多用」というスタイルを採用する。一九〇二年一月の時点では、デラゴア湾一四、〇〇〇トンに対して、南アフリカ全域(ケープ、ナタール)五一、〇〇〇トンであった港灣の取扱高が、一九〇六年八月には二一、〇〇〇トン対一七、〇〇〇トンとなっている、といったデータを多用して、「……こうしたこと全ての教訓は明白である。他の政府の下にいる人々のために、目に見え、連続的かつ本質的な財政上の損失に耐えることはできない。……」と小括する。鉄道の官有化も、問題の解決とはならなかった。カーは、「外国の先例に学ぶ」スタイルに転じる。とくに、アメリカ合衆国の事例を検討しつつ、「……こうした困難をいかに克服したらよいかを提案するために、南アフリカの人々がわたしを任命しているわけではない。しかし、南アフリカ鉄道制度の統合のために克服すべき困難の規模を提示することには、わたしは前向きかつ躊躇しない。……」^⑯と締めくくる。

しかし、こうした創意工夫にもかかわらず、『セルボーン覚書』の評判は芳しくなかった。^⑨例えば、旧オレンジ自由国大統領M・T・スタインはメリマンに、「……誉めるのがしきたりであることは承知していますが、われわれの連邦結成への道に存する多くの困難について、彼「セルボーン」がとり除いてくれたのか、あるいはわれわれにとり除き方を教えてくれたのか、わたしにはわかりませんでした。パンフレット『セルボーン覚書』全体は粗雑で、レトリックと悪い話に満ちています。……」と書き送っている。また、本国の干渉に対する反発も消えていない。一九〇七年七月一五日付の『ケープ・タイムズ』紙は、「……帝国政府の干渉は南アフリカの繁栄にとって、過去災厄であつたし、いまもそうである。……こうした状況に対する唯一の現実的修正策は、南アフリカの利害を全体として処理できる、南アフリカ国民政府の実現である。……」^⑩と同書を書評している。キンダーガルテンとは異なり、連邦結成を本国の干渉に対する防波堤と捉えていることに留意したい。更に、ケープ政界では一九〇八年二月、同書の発表にも協力した首相ジエイムソンが植民地議会選挙に敗北し退陣、メリマンがあとを継ぎ、メンバーの苦境は深まっていく。

他方、この時期は南アフリカ白人の世論において、「白人国家」への関心が高まった時期でもある。メリマンは中国人労働者導入問題に際しても、スマッツの「白人のラント」に賛意を示していたが、一九〇七年二月、ナタールにおいてズールー人のバンバタ蜂起が終結すると、原住民問題への関心を鮮明にする。^⑪なお、先述の『ケープ・タイムズ』紙の書評も、中国人労働者導入問題を干渉の典型例とし、同問題が集会的記憶として定着することに貢献している。こうした状況に対応し、連邦結成への白人「国民」の主體的参画を引き出すべく、メンバーは、次の二つの軌道修正を実行に移した。第一の軌道修正は、連邦結成を一大「国民」運動として展開することである。キンダーガルテンは一九〇八年以降、「連邦結成運動」に着手する。同運動でも、メンバーは立案に携わったものの、基本的には裏方に徹した。他方、執行部には、ケープをはじめ南アフリカの政治家が数多く名を連ねた。興味深いのは、連邦結成協会の日常的活動が、講演会の開催、定例会での学習と討論等、会員の幅広い参加を前提としていた点である。^⑫また、運動の機関誌であり、当時唯一の、

表2 『南アフリカの政府』第1巻の構成

第1部 イギリス領南アフリカ概観		
第1章	帝国と植民地のフロンティア	pp.3-39
第2章	内部の行政単位	pp.40-45
第2部 政府の一次的機能		
第3章	第2部の構成	pp.49-51
第4章	法律	pp.52-97
第5章	社会の防護	pp.99-105
第6章	社会の構成	pp.106-164
第7章	社会の改良	pp.165-194
第8章	交通・通信	pp.195-229
第9章	富の生産	pp.230-256
第10章	中央・地方政府機能の分割	pp.257-266
第3部 政府の二次的機能		
第11章	第3部の構成	pp.267-268
第12章	副次的二次的機能	pp.269-271
第13章	情報	pp.272-276
第14章	歳入	pp.277-295
第15章	債務	pp.296-310
第16章	歳出の管理	pp.311-321
第17章	行政	pp.322-344
第18章	地方自治	pp.345-361
第19章	連邦への二つの道	pp.362-372
第20章	オーストラリア中央政府の開始	pp.373-389
第4部 政治支配の機構		
第21章	政治の主題	pp.391-398
第22章	国王・総督	pp.399-400
第23章	内閣	pp.401-404
第24章	議会	pp.405-424
第25章	国王・総督、内閣、議会の位置関係	pp.425-439
第5部 南アフリカ連邦結成の法的手段		
第26章	南アフリカ政府の法的基礎	pp.441-454
索引		pp.455-467

南アフリカ全域にわたる定期刊行物であった『ステイト』誌でも、国旗の募集、小説、写真の懸賞等、読者参加型の企画が目立つ。⁵⁾

他方、第二の軌道修正は、『セルボーン覚書』を改善し、新しい一書をまとめることである。キンダーガルテンは一九〇八年一〇月、連邦結成運動の出版物として、『南アフリカの政府』を世に問うた。著者は「匿名」であるが、実際にはカーティスが大半を執筆している。表二、三は、同書の構成を示す。内容は『セルボーン覚書』と類似しているが、重要な相違が二点ある。相違の第一点は、「白人国家」の認識を鮮明にしていることである。例えば、第六章「社会の構成」

表3 『南アフリカの政府』第2巻の構成

図表1	地域と人口	p.1
図表2	植民地間連絡会議	pp.2-5
図表3	府の体制	pp.6-11
図表4	司法制度	pp.12-13
図表5	裁判所裁判権の比較	pp.14-47
図表6	鉱業法の比較	pp.48-67
図表7	原住民教育	p.68
図表8	人口調査の費用	p.69
図表9	アメリカ黒人	pp.70-96
図表10	貯蓄銀行収支	pp.97-101
図表11	鉄道収支	pp.102-107
図表12	鉄道組織	pp.108-111
図表13	郵便収支	pp.112-119
図表14	郵便組織	pp.120-127
図表15	郵便補助金	p.128
図表16	鉄道当局者の比較	pp.129-130
図表17	オーストラリア国有鉄道の経営	pp.131-137
図表18	港湾収支	pp.138-147
図表19	植民地間農業連合決議	pp.148-151
図表20	政府の一次的機能の分類	pp.152-157
図表21	立法主題一覧	pp.158-162
図表22	通常歳入源	pp.163-211
図表23	歳入の徴収	pp.212-217
図表24	公債	pp.218-229
図表25	歳出予算例	pp.230-235
図表26	通常歳出項目	pp.236-266
図表27	歳出入比較	pp.267-269
図表28	貸借対照表	pp.270-281
図表29	行政組織図	pp.282-366
図表30	ケープ植民地の教育地方当局者	pp.367-369
図表31	各植民地総督府開設の開封勅許状	pp.370-381
図表32	上下院	pp.382-395
図表33	選挙人資格と登録	pp.396-399
図表34	選挙人構成等	pp.400-414
図表35	歳出法案	p.415
図表36	南アフリカ議会法案	pp.416-417
図表37	自治植民地議会	pp.418-423

には、「……〔普通、〕サクソン人とノルマン人のように、二種類の人々のあいだに出現する敵愾心は、……偶然の産物である。かれらは、そうした敵愾心にもかかわらず、共通の政治目的のために協力できるし、時間の経過とともに一つの国民になることもできる。南アフリカの白人間の争いは、こうした一瞬のものである。しかし、南アフリカの黒人と白人のあいだの人種問題が、深く根差した反感から生じていることは、ほとんど考えなくてもわかる。ヨーロッパ人と黒人は、共通の祖先を人間と呼べないほどの時代に別れてしまったに違いない。……」^②との記述がある。中国人労働者導入問題を契機とした「白人国家」の認識は当初、排除の主対象を「アジア人」においたが、ここでは明確にアフリカ人となった。

相違の第二点は、全国会議(連邦結成のための各地域代表者会議。一九〇八年一〇月—一九〇九年五月、ナタールのダーバン、ケープタウン、オレンジのブルームフォンテインと三次にわたって開催)の参加者への配布、連邦結成協会の講演会、定例会のテキストというように、読者を明確に想定していることである。「読者が議論できるようにすべく情報を提供する」ことを目指し、第二巻を資料編に当てている。また、話題を特定の方向に誘導するスタイルも、幾分和らいだ。例えば、『セルボーン覚書』の「南アフリカ鉄道建設に関する分断の結果」に対応する第八章「交通・通信」では、「外国の先例に学ぶ」と、「統計の多用」を踏襲する一方、「歴史的系譜をたどる」記述は消えている^②。歴史の問題は、深刻な対立にもつとも帰結しやすかったためである。『南アフリカの政府』は、キンダーガルテンのライヴアルであつたメリマンの称賛を得た^③。また、カナダ、オーストラリア、ドイツ等の先例に学んで、連邦政府の機構について提言した『連邦の枠組』(一九〇八年)、メンバーのR・H・ブランドが執筆した『南アフリカの連邦』(一九〇九年)等の類書が出たことも、『南アフリカの政府』の成功を裏付けているといえよう^④。

以上小括すると、南アフリカ連邦結成への関与に際して、キンダーガルテンは、ケープの「コロニアル・ナショナルイズム」に直面した。この問題への対応を通して、メンバーは、「シティズンシップ」涵養のスタイルを更に軌道修正する。こうした経験は、イギリス帝国全体の問題に対するメンバーの関心にも反映していくことが予測できよう。

- ① R. Jebb, *Studies in Colonial Nationalism*, London, 1905, pp. 272-279.
- ② Id., *The Britannic Question: A Survey of Alternatives*, London, 1913.
- ③ May, 'Round Table', pp. 36-37; Dubow, 'Colonial Nationalism', pp. 66-67. 以下を参照。Nimocks, *Milner's Young Men*, p. 133; Kendle, *Round Table Movement*, p. 31.
- ④ B. Williams (ed.), *The Selborne Memorandum, A Review of the Mutual Relations of the British South African Colonies in 1907*, London, 1925, pp. 90-92. 以下を参照。Selborne to Nathan, 13 May, 1908, in: D.E. Torrance, *The Strange Death of the Liberal Empire: Lord Selborne in South Africa*, London, 1996, p. 194; Jebb's Travel Diary in South Africa, April, 1906, in: D. Schreuder, 'Colonial Nationalism and Tribal Nationalism: Making the White South African State, 1899-1910', in: J. Eddy and D. Schreuder (eds.), *The Rise of Colonial Nationalism: Australia, New Zealand, Canada and South Africa First Assert Their Nationalities, 1880-1914*, Sydney,

- 1988, p.198.
- ⑤ Curtis, *With Milner*, p.345.
- ⑥ R. Feetham, *Some Problems of South African Federation and Reasons for Facing Them*, Johannesburg, 1906.
- ⑦ F.S. Oliver, *Alexander Hamilton: An Essay on American Union*, London, 1907.
- ⑧ Robinson's Diary, 1 September, 1906, in: May, 'Round Table', p. 32.
- ⑨ 例へば「一八八五年一月三〇日付の『ベトリキマー』紙(マフリカーナ・ナショナルリスター新聞)が「……政治的目的のためには公の集会に参加するよりも、彼(ベトリキマー新聞)よりもむしろ我々(我々)は……」と記す。Patric, 30 January, 1885, in: M. Tamarkin, 'Nationalism or Tribalism: The Evolution of Cape Afrikaner Ethnic Consciousness in the Late Nineteenth Century', *Nations and Nationalism* 1-2 (1995), p.237.
- ⑩ P. Buckner, 'The Royal Tour of 1901 and the Construction of an Imperial Identity in South Africa', *South African Historical Journal* 41 (1999).
- ⑪ O. Schreiner, *The Political Situation*, London, 1896, pp.100-107, 123-141.
- ⑫ 例へば J.P. FitzPatrick, *The Transvaal from Within*, London, 1899, J.C. Smuts, *Het Eeuze van Onrecht*, Kaapstad, 1900.
- ⑬ J.T. Molteno, *Further South African Recollections*, London, 1926, p.19.
- ⑭ Merriam to Smuts, 4 June, 1904, in: Hancock and Van der Poel, *Smuts Papers vol. 2*, p.173.
- ⑮ Williams, *Selborne Memorandum*, pp.1-25.
- ⑯ *Ibid.*, pp.48-94.
- ⑰ *Ibid.*, p.63.
- ⑱ *Ibid.*, p.94.
- ⑲ アフリカ人新聞の評は「原住民政策に関するものが主体であった。A. Oelendal, *Black Protest Politics in South Africa to 1912*, Totowa, 1984, pp.94-96.
- ⑳ Steyn to Merriam, 11 September, 1907, in: P. Lewsen (ed.), *Selections from the Correspondence of John X. Merriam 1905-1924*, Cape Town, 1966, p.49.
- ㉑ *Cape Times*, 15 July, 1907.
- ㉒ 例へば Merriam to Smith, 1 January, 1907, in: Lewsen, *Selections*, p.30.
- ㉓ 例へば Merriam to Smith, 26 October, 1907, in: *Ibid.*, p.53. また「ア・ヘンリー」問題とベンベンタ蜂起について「同時に言及する箇所もある。Merriam to His Wife, 15 November, 1907, in: *Ibid.*
- ㉔ 運動の文書は「……連邦結成協会が存在するよりもむしろゆる市民は、連邦結成の大義のために何事かをなすことが可能となっている。協会が提供する文獻を読み、会合に参加することによって国家の体制が解決しようとしている問題を理解する準備が各々にできる。誰もが他の人を勧誘し、連邦結成の重要性に目覚めさせることができようのである。……」と記す。日常的活動について、例えば「ケープ内陸部のクラドック協会は、一九〇八年一月の定例会において運動の全国組織である連邦結成協会連合成立の報告に引き続いて「連邦結成は農民にいかに影響するか」と題する講演、討論を行っている。拙稿「『和解』の創出」一四一―一五頁。
- ㉕ 同、一六頁。

- ②⑥ L. Curtis, *The Government of South Africa vol. 1*, Cape Town, 1908, pp.123-124. 90.
- ②⑦ *Ibid.*, p.viii.
- ②⑧ *Ibid.*, pp.195-229.
- ②⑨ Williams' Diary, 29 September, 1908, in: Lavin, *Lionel Curtis*, p. 90.
- ③⑩ Closer Union Society, *The Framework of Union: A Comparison of Some Union Constitutions*, Cape Town, 1908; R.H. Brand, *The Union of South Africa*, Oxford, 1909. 『連邦の枠組』の著者は匿名であるが、実際には法律家 B・K・ロントが執筆している。

第四章 帝国再編への関与と「シティズンシップ」

一九一〇年、南アフリカ連邦結成が実現すると、キンダーガルテンのメンバーはイギリスに帰国し、帝国全体の再編に関与する。その際にも、「シティズンシップ」の涵養は重要な意味を有した。しかし、こうした問題に対する先行研究の関心は、概して低い^①。以下では、メンバーの南アフリカ経験との対応に留意しつつ、かかる議論を整理していきたい。

南アフリカ連邦結成と同じ一九一〇年、キンダーガルテンは『ラウンド・テーブル』誌を創刊する。メイが指摘するように、同誌は二〇世紀を通して、帝国の「コモンウェルス規模の世論形成を志向し、また同誌を中核とするラウンド・テーブル運動は、「ロンドンに本部、各自治領に支部」をおくアソシエーションとなった^②。つまり、こうした雑誌と運動の存在自体、「シティズンシップ」を体現していたといえる。

しかし、キンダーガルテン（あるいはラウンド・テーブル）と「シティズンシップ」との関係は、以上の範囲にとどまるものではない。問題は次の二つに大別しうる。

第一に、メンバーは「シティズンシップ」をテーマとする執筆活動を盛んに行っている。例えば、カーティス編『諸国民のコモンウェルス』（一九一六年）の副題は、「イギリス帝国のシティズンシップの性質に対する調査」であった^③。同書は、ラウンド・テーブル運動の初期の成果であるが、複数巻の計画は未完に終わる^④。しかし、その全体構想は、同年に編

者カーティスが著した『コモンウェルスの問題』によって知ることができる。カーティスはまず、第一次世界大戦勃発時の帝国に対する自治領の献身的態度を検討し、背景に自治拡大への渴望を読みとる。ただし、この問題は対応を誤ると、アメリカ独立革命の災厄を再度招来するかもしれない。^⑤そこでカーティスは、「自治領を英領コモンウェルスから疎外することなく、また各々を独立共和国に変えることなく、その人々をブリテン諸島の人々と同等の地位におく」ことが重要である、と説く。ゆえに、帝国政府はとくに外交問題に関して、「ブリテン諸島の議会に対してだけでなく、自治領の議会に対しても責任を負い」、また将来的には、「帝国議会の議席をすべての自治領からの代表に開く」よう提言した。^⑥統治機構の具体的目標は時代に応じて変化するが、「シティズンシップ」の問題は一貫して、メンバーの執筆活動の中心を成している。^⑦

第二に、とくに一九二〇年代以降、メンバーは白人の自治の問題に多くの時間を割いている。その一例は二〇年代前半、アイルランドの分割を調停し、南部を自治領とする一方北部を連合王国にとどめたことである。カーティス、カーは二一年のアングロ・アイルランド条約成立に際して、イギリス政府代表団の一員として中心的役割を担い、フィータムは二四年、国境確定委員会の議長を務めた。^⑧また三〇年代初めには、同じくフィータムが上海租界の自治拡大に寄与している。^⑨ここで注目すべきは、その世論誘導の手法である。アイルランドに関するカーティスの二四年の論文は、「現在の情勢下の不和を説明するには、「対立している」デ・ヴァレラが書き出したように書き出す必要がある」と記し、この問題の「歴史的系譜をたどる」。^⑩また、上海租界に関する『フィータム報告』には、「統計の多用」などの手法が目立つ。^⑪他方、一〇年代末の活動の焦点となるインドの有色人種の自治に関しては、地方政治への限定的参画を認めたに過ぎない。^⑫こうした様々な動きは一体となつて、ウェストミンスター体制の環境を整備する。

以上の、帝国全体の再編に対するメンバーの関与に、南アフリカ経験が大きく影響したことは疑いない。そのことの自覚も現に存在した。例えば、カーティスは一九〇七年、「……南アフリカは縮図であり、当地に特化して考えたことの多

くは、帝国自体にも等しく当てはまることだが、明らかに一つつあります。……南アフリカについてし得ること、すべきことの全てを為し終えたとき、同種の仕事を帝国内関係についても開始すべき時機が来るものと思います。……^⑬と書き残している。南アフリカは他の従属植民地、あるいは白人定住植民地と異なり、白人も有色人種も一定の人口を有し、一植民地にして帝国全体が抱える問題のほとんどを抱えていた。こうした意味での「縮図」として、当地はメンバーに、「シティズンシップ」の示唆を与えたのである。

他方、ここまで整理してきたことは、キンダーガルテンが帝国Ⅱコモンウェルスにおいて推進しようとした「シティズンシップ」の性格規定とも関わる。近年、J・ダーウインは、本国のみの「ブリティッシュ」概念に対し、帝国Ⅱコモンウェルス単位の「ブリタニック」概念が一九世紀末以降生じたとして、「ブリタニック・シヴィリティ」の存在を示唆した。^⑭また、C・ブリッジ&K・フェドロウィッチもダーウインをふまえて、「ブリタニック・アイデンティティ」の存在を想定している。^⑮こうした問題提起に倣えば、キンダーガルテンの「シティズンシップ」は、「ブリタニック・シティズンシップ」と言いうるかもしれない。その意味内容が、白人定住植民地において「シティズンシップ」を涵養し、高度の自治を達成しうる「市民社会」を建設することだけでなく、各植民地の社会が対等の立場に立つて帝国Ⅱコモンウェルスを建設することも含んでいるためである。

以上小括すると、一九一〇年以降の帝国再編への関与に際しても、「シティズンシップ」の涵養は、キンダーガルテンの活動において重要な意味を有した。そこには、南アフリカ経験との対応が確認できる。また、この「シティズンシップ」は、「ブリタニック・シティズンシップ」と言いうるかもしれない。

① 例へば、Nimocks, *Milner's Young Men*; Kendle, *Round Table Movement*.

② May, 'Round Table', pp. 4, 40-41.

③ Curtis (ed.), *The Commonwealth of Nations: An Inquiry into the Na-*

ture of Citizenship in the British Empire, and into the Mutual Relations of the Several Communities Thereof.

④ May, 'Round Table', p. 98.

⑤ L. Curtis, *The Problem of the Commonwealth*, Toronto, 1916, pp.

3-12.

⑨ *Ibid.*, pp.132, 140, 148.

⑩ 例へば *Id.*, *Critias Dei*, 3 vols., London, 1934-1937.

⑪ D. McMahon, 'Ireland and the Empire-Commonwealth, 1900-1948', in: Brown and Louis, *Oxford History vol. 4*, p.148.

⑫ R. Bickers, *Britain in China: Community, Culture and Colonialism 1900-1949*, Manchester, 1999, pp.28, 136, 148.

⑬ L. Curtis, 'Cutting Ireland in Two', *Atlantic Monthly* 134 (1924), pp.823-824.

⑭ R. Feetham, *Report of the Hon. Richard Feetham, C.M.G., Judge of the Supreme Court of the Union of South Africa, to the Shanghai Municipal Council*, 4 vols., Shanghai, 1931-1932 (南満州鉄道株式会社調査課訳『フイーナム報告——上海租界行政調査報告——』全四巻、南

おわりに

キンダーガルトンのメンバーが、白人を対象とする「シティズンシップ」の涵養に多大な関心を寄せていたことは、南アフリカ滞在のきわめて初期より確認できる。関心の一部は、在英時の経歴に起源を有したが、その対象が植民地白人に拡大したのは、「フェルトのロマンス」を通してのことである。この経緯を反映して、メンバーは、救貧と社会改革の対象としてボーア人労働者層を明確に措定した。しかし、トランスヴァール再建時の「シティズンシップ」涵養に際しては、エリート志向の限界も存在した。

この矛盾を克服し、「シティズンシップ」観をクリアにすることは、メンバーにとって次の段階の問題となる。中国人労働者導入問題を一つの契機として、メンバーは、課題を「白人国家」の創出にシフトしていく。このシフトは、自治へ

満州鉄道（一九三二—一九三三年）

⑮ インドの問題はダヴ、カーティス、フイーナム、カーが関与した。

May, 'Round Table', p.269. 以下は官僚制との比較を通して、責任政府のメリットを論じる。L. Curtis, *Letters to the People of India on Responsible Government*, London, 1918, p.97.

⑯ Curtis to Selborne, 18 October, 1907, in: May, 'Round Table', p.2.

⑰ J. Darwin, 'Civility and Empire', in: P. Burke, B. Harrison and P. Slack (eds.), *Civil Histories: Essays Presented to Sir Keith Thomas*, Oxford, 2000, p.334.

⑱ C. Bridge and K. Fedorowich, 'Mapping the British World', *Journal of Imperial and Commonwealth History* 31-2 (2003), p.8.

の関心の明確化、スタイル確立、あるいは対象拡大等、「シティズンシップ」涵養の深化とも対を成していた。

帝国と「白人国家」の關係についてメンバーが認識を深めるのは、南アフリカ連邦結成への関与に際してである。このとき、メンバーは、ケープの「コロニアル・ナショナリズム」に直面する。一九世紀末に起源を有する当地のナショナリズムは、帝国を上位に戴きつつ、植民地の独自性をも主張し、その信奉者は『セルボーン覚書』の批判者となった。この勢力への対応を通して、メンバーは、「シティズンシップ」涵養のスタイルを更に軌道修正した。その成果の一端は、『南アフリカの政府』の出版である。

一九一〇年以降の帝国再編への関与に際しても、「シティズンシップ」の涵養は、メンバーの活動において重要な意味を有した。そこには、南アフリカ経験との対応が確認できる。また、この「シティズンシップ」は、「ブリタニック・シティズンシップ」と言いうるかもしれない。

本稿は、イギリス帝国史に対する「植民地経験」の影響に焦点をおいたが、若干別の次元には、南アフリカ史に対する影響の問題も存在する。^① 本稿はまた、イギリス帝国史研究一般において、「シティズンシップ」への関心が希薄であることを一つの問題として立論した。このテーマに注目することによりはじめて、本国と植民地の双方向的關係を解明し、イギリス国内史と帝国史を結節することも真に可能となるに違いない。その意味で本稿の成果は、階級に基軸をおき、帝国を「一つの全体的な相互システム」と捉えるD・キャナダインの近著^②等と照合する必要がある。更に、こうした問題を解く鍵の一つは、アソシエーションにある。連邦結成協会のことは先述したが、ラウンド・テーブル運動も、南アフリカに支部をおいた。^③ 南アフリカと帝国を結節するアソシエーションのネットワークは、他にも確認できる。^④ また本稿の成果を、非西洋世界に「市民社会」を移植する演出というコンテクストにおいて再検討することの重要性は、改めて言うまでもない。しかし、かかる諸問題の本格的検討は、他日を期したいと思う。

① メンバーの内、ダンカン、フイーラムは南アフリカに残り、各々総

督、最高裁判所判事にまで上り詰めた。この二人、あるいはスマッツ

等が、キンダーガルテンの成果を継承することとなる。タンカン、フ
 イータムについて、先行研究は存在しない。一九三〇年まで南アフリ
 カに残るウィンダムについては、I. Van der Waag, 'Hugh Wyndham,
 Transvaal Politics and the Attempt to Create an English County
 Seat in South Africa, 1901-14', *Journal of Imperial and Common-
 wealth History* 31-2 (2003).

② D. Cannadine, *Ornamentalism: How the British Saw Their Empire?*,

London, 2001.

③ ラウンド・テーブル運動の南アフリカ支部について、先行研究は存
 在しない。オーストラリア支部については、L. Foster, *High Hopes:
 The Men and Motives of the Australian Round Table*, Melbourne, 1986.

④ 廖文毅 'S. Dubow, 'A Commonwealth of Science: The British
 Association in South Africa, 1905 and 1929', in: S. Dubow (ed.),
Science and Society in Southern Africa, Manchester, 2000.

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程

)

The Experiences of Milner Kindergarten in South Africa (1899—1910) and the Concept of “Citizenship”

by

HORIUCHI Takayuki

The members of Milner Kindergarten, all of whom were the Oxford graduates, played an important role in the administrative staff of Lord Milner, the High Commissioner, both in the reconstruction of Transvaal in the aftermath of the Second South African War of 1899—1902 and in the unification of South Africa in 1910. They also contributed to the transition from the British Empire to the Commonwealth as leading members of the Round Table group in the first half of the 20th century. However, researchers have yet to consider the meaning of their South African days or their conception of citizenship. Therefore, the purpose of this article is to rethink their experiences in South Africa in terms of “citizenship”.

Some of the members had been interested in the problems of philanthropy, social reform and citizenship since their Oxford days, and they had been sympathetic towards the white colonists in South Africa following their move there at the turn of the century. However, in the reconstruction of Transvaal, they discriminated against the poor whites of the Boer population as regards citizenship, although they considered them to be fit objects of philanthropy and social reform.

In conclusion, there were two turning points in the experiences of Kindergarten in South Africa. First of all, because of Boer opposition to the introduction of Chinese labourers in Transvaal, they came to think of the poor whites as holders of citizenship, and they became interested in the creation of the concept of “a white man’s country”. Secondly, because of the “colonial nationalism” displayed in the Cape during the unification of South Africa, they learned how colonial citizens might be led, and they transferred their efforts to the new job of solving the problems of the Empire.